

『高知県立大学 文化論叢』第10号刊行にあたって

文化学部長 三 浦 要 一

『文化論叢』は高知女子大学の時代に、創刊号（1999年3月）から第13号（2011年3月）まで計13冊が刊行された。高知県立大学に共学後は、創刊号（2013年3月）から第9号（2021年3月）の9冊が刊行されている。現在、「高知県立大学学術情報リポジトリ <https://u-kochi.repo.nii.ac.jp>」は、高知女子大学『文化論叢』より29編、高知県立大学『文化論叢』より48編をそれぞれ掲載し、検索していただければ誠に幸いである。

高知女子大学時代の『文化論叢』の「序 創刊号によせて」を読み返すと、平成11年（1999）3月に文化学部初代学部長の生田勝彦教授が「さてこのたび、文化学部文化学科発足を記念して『文化論叢』なる学術雑誌を発刊する運びとなった。この企画は、数年前から若手教員を中心に、改組のおりには大学の紀要とは別に文化学部独自のものを刊行したい、という声が起こったことに始まり、それが実現したものである。」と書かれている。『文化論叢』は、平成10年4月の文学部から文化学部の改組にあたり、学部独自の学術雑誌として刊行することになったのであった。

「序 創刊号によせて」には「いわゆる3号雑誌に終わらせたくないし、質量ともなっていて永続ことが切望される。」とあって、3号雑誌に終わらずに永続することが切望されていた。令和4年（2022）3月に『文化論叢』の第10号を刊行し、通算すると23号を数え、四半世紀にわたる刊行も射程に入ってくる。

これまでに記念号は、定年退職される教員の年度にあわせて刊行し、高知女子大学『文化論叢』の第4号、第5号、第9号、第10号、第12号、第13号、高知県立大学『文化論叢』の第2号、第3号、第6号の計9冊であった。近年、文化学部では、学内の競争的資金である戦略的研究推進プロジェクトに3件が採択されており、第10号は記念号として刊行し、顕著な研究成果をあげた以下の3編を掲載する。

- ・言語文化教育としての『民話』を活用した学術的・国際的な地域還元型教育〔研究実施責任者：橋尾直和教授、2018～2019年度〕
- ・中山間地域における生活圏の確保に向けて―土佐郡大川村における地域創造〔研究実施責任者：飯高伸五准教授、2017～2018年度〕
- ・永国寺キャンパスを拠点とした地域文化資源の保存・整備と利活用に関する実践的研究〔研究実施責任者：飯高伸五准教授、2019～2020年度〕

上記以外に、第10号はこれまでの学術雑誌としての刊行方針を継承し、論文3編、研究ノート1編を掲載している。高知女子大学『文化論叢』の第7号（2005年3月）の「編集後記」から「今後も、より高水準の論文を揃え、文化学部の実力を広く外部に示すことを目標としていきたい」を引用し、刊行にあたってを終えることにしたい。